



作られた家宝

―長州萩で受け継がれた宗像の記憶

『新修宗像市史』中世部会から

萩の草刈家と宗像家

古代から中世までの長い間、宗像地方の強力なリーダーであった宗像大宮司家は、戦国時代天正14(1586)年に宗像氏貞が病死したために断絶します。

未亡人となった氏貞の妻は、娘の嫁ぎ先である毛利家臣草刈家を頼って萩に身を寄せます。このときに、大宮司家に伝わる多くの古文書も一緒に草刈家にもたらされました。

一方、氏貞は一族内の争いに勝利して大宮司となりましたが、そのときに反対派の人々が命を奪われるという事件が起きています。その人たちをまつるために建てられたのが、「山田の地蔵さん」で知られる増福院です。この事件の難から逃げ延びたという人物の末裔が萩に移住して、江戸時代は萩藩の御用商人宗像家となりました。

宗像家の家宝

萩でのこの出会いが偶然なのかどうかはわかりませんが、宗像を遠く離れた地で、宗像にゆかりのある家どうし、長州毛利藩士草刈家と商人宗像家は身分の垣根をこえて親交を結びます。

宗像家では、草刈家が所有していた宗像大宮司家の古文書類を、忠実に写しとって家宝として代々大切に守り伝えてきました。また両家で協力しあって宗像大宮司家系図を二部作成し、それぞれの家で保管してきました。

一族内の争いという時代の嵐によって、やむをえずふるさと宗像を離れねばならなかった宗像家の人々にとって、草刈家の古文書を目にしたときの喜びと感動はどれほどのものだったでしょう。ご先祖そのものにも見えたのではないのでしょうか。忠

実に写して、家宝にしたいという思いは容易に想像できます。その後、天明7(1787)年に、草刈家が保管してきた古文書類と大宮司家系図は宗像大社に返納されました。写真は、宗像大社所蔵の原本と、宗像家で作成された写しです。全体の体裁、一字一字の文字はもちろん、花押(かおう)と呼ばれる個人のサインも忠実に写しています。原本である草刈家所有の古文書を見ながら写しとったことは明らかで、両家の信頼関係がなければできなかったに違いありません。

激動をこえて

大宮司家の古文書を所有していた草刈家は、中国地方一帯に勢力を有していた主君毛利家が関ヶ原の合戦での敗北により領地を削減され、苦難の時期を過ごしますが、古文書類の大半を守り伝えて宗像大社への返納に至りました。現在、宗像大社が所有する重要文化財指定の中世古文書は、草刈家から返納されたものがほとんどです。

商人宗像家は、明治維新の激

動期に萩を離れ、さらに第二次大戦の戦火もくぐりぬけて、家宝の古文書を現在に伝えていきます。

草刈家、宗像家は、「歴史」を守り伝えることの大切さを、現代のわたしたちに具体的に示してくれているのです。

(中世部会 河窪奈津子)



八条院庁下文写 「宗像家所蔵」



八条院庁下文 「宗像大社所蔵」